

論説体中国語読解力養成は焦眉の急

— 読めない日本人、情報砂漠を彷徨？



麗澤大学 客員教授

三瀧正道

Masamichi Mitsuma

ビッグデータ、クラウドコンピューティングを駆使した新しいビジネス形態は日進月歩だ。そんな中、中国語の書き言葉として一般的に用いられている「論説体中国語」が読めなければ、中国では新聞はもちろんインターネットから情報が取れず、情報砂漠にいるも同然だ。中国におけるネットの1日の情報量は中国全土の図書館の蔵書の総和にも匹敵すると言われる。インターネット全盛時代への対応が必要だ。

誤訳による訴訟トラブルが発生

中国のある裁判所の統計では「日本企業関係のトラブルの1割が法律や特許内容の誤訳が原因」とされているが、なぜだろうか。

1949年の中華人民共和国建国以後、中国では「ピンイン」と呼ばれる発音記号がつくられ、新聞の文章も話し言葉に限りなく近づけて、国民誰もが読めるようにする努力を始めた。

それ自体は正しい方向だったが、それによって「書き言葉は話し言葉と一緒にになったのだから、独立したジャンルとして扱い研究するのはナンセンス」となった。

しかし、漢詩でも分かるように中国人はリ

ズムを尊び、格調高い文章が大好き。「ピンイン」を導入(1958年)してから60年近く経過し、現代中国語書き言葉の4割近くが文法や語彙などの要素で、話し言葉とは異なるようになった。ところが「書き言葉は話し言葉と一緒に」という前提に縛られ、日本でも中国でも書き言葉が一切研究されず、教育に反映されることもなかった。教材としては使われても、教師がその違いを理論的に把握し、説明できない。

中国では近年この面の研究が盛んになり、日本でも学会で取り上げられ始めたが、長年研究されていなかったために、日本ではプロの翻訳者でも経験的にスキルを身に着けた人ばかり。それゆえ例えば特許関係の翻訳でも、必然的に一定量の誤訳が生じる。それが前述の裁判所の数字につながるのである。

企業の中国語教育をどうすべきか

多くの研修担当者、さらにはその上司の「中国語教育のために何が必要で何をしなければならぬか」ということに対する理解が不足している。中国ビジネスに関わるとなれば、日常生活やビジネスの場で必要なコミュニケーション